

ボランティアリーダー養成講座参加者の参加動機と参加者特性

－A区の場合－

○山崎律子、上野 幸 [余暇問題研究所]

キーワード：高齢者、高齢者レクリエーション、ボランティア、ボランティアリーダー、
高齢者余暇活動、動機、特性

I はじめに

今回の実践研究は、1997年に筆者らが始めた高齢者（要支援・介護を含む）レクリエーション研究の一連研究である。遡ってみれば、「有料老人ホームにおけるレクリエーション活動の状況と問題点」を事例報告の形で発表した。（注1）1999年には、高齢者が好む余暇活動の類型化やレクリエーション支援方法の確立に向けてのために、高齢者個人に面接調査を実施して、高齢者が好む余暇活動とその生きる信条の把握を試みた。（注2）（注3）さらに、2002年には、高齢者の好む余暇活動を類型化する過程の中で、余暇活動と生きる信条が、深くコホートに関係のあることが判明した。これらの成果は、時間をかけて丹念に面接したことによるものであり、アンケート調査や単に項目立てをして質問面接だけでは得ることができないことを表わしている。

今回の研究におけるボランティアリーダーという言葉は、まだ一般化されていない。そもそもボランティア活動は余暇活動の一領域と解することができる。ボランティア活動への参加者は、圧倒的に女性が多く、年齢的に見ると60歳代が最も多い。（注4）したがって筆者らは、参加者との相互作用の中、現場の視点から研究をすることによって、一般的な調査研究では見えない日々における人間の繊細な機微に触れる事象を捉えることが可能になるのではないかと考える。しかしこの種の研究では一度に大量データを処理して法則化できないところに限界があることも事実である。それらを踏まえて筆者らは、A区の主催事業であるボランティアリーダー養成講座指導依頼を受け、3年にわたり関わってきた。したがって、従来まで行われてきた高齢者研究の一環としての、本研究の意義があるものと考えられる。

II 目的

参加者が、区主催事業ボランティアリーダー養成講座になぜ参加するのかという疑問解明と、それら参加者は他の余暇活動は何をしているのか、また人生をどのように考えているのか、すなわち参加動機、参加者特性と信条を知ると同時にコホートと何らかの関係を把握することによって、今後の筆者ら的高齢者との関わりを、より効果的にする意図が本実践研究の目的である。それとともに、A区事業の意義を側面から貢献しようとした。

III 方法

本実践研究の目的を達成するために、筆者らの参与観察および深層面接を行った。（筆者らと面接希望者との間に好ましい感情が成立、かつ有志が面接希望、個人が1時間半～2時間の持ち時間があるなどの条件から、深層面接法の適用を判断した）

1. 期間：2011年8月～9月

2. 対象：2011年度のA区ボランティアリーダー養成講座受講者全員（面接については、面接希望者のみとした。結果的には全画面接を希望した）
3. 講座参加者数および面接希望者数：17人
4. 分析：各人のプロフィール、参加動機、余暇活動、信条など

IV 結果

1. 対象者の性別、生年、年齢、出身地（グループ別）

グループ	対象	性別	生年	年齢	出身地	対象	性別	生年	年齢	出身地
グループ1	A	男性	S10	76	東京都	D	男性	S15	71	東京都
	B	女性	S12	74	千葉県	E	女性	S16	70	千葉県
	C	女性	S15	71	東京都	F	男性	S16	70	東京都
グループ2	G	女性	S18	68	和歌山県	I	女性	S19	67	東京都
	H	女性	S18	68	東京都	J	女性	S19	67	東京都
グループ3	K	女性	S22	64	東京都	N	女性	S23	63	東京都
	L	女性	S23	63	東京都	O	女性	S24	62	東京都
	M	女性	S23	63	長野県					
グループ4	P	女性	S27	59	東京都	Q	女性	S27	59	東京都

2. 結果の所見

面接結果を纏めると次のようになる。

- 1) 全面接者17人のうち女性が圧倒的に多かった。（男性3、女性14）
- 2) 第二次世界大戦前生まれは（70歳以上男3、女3）6人であった。疎開経験者4人。仮にグループ1としておく。
- 3) 戦中生まれは68歳と67歳の女性4人であった。仮にグループ2としておく。
- 4) 戦後生まれの60歳代（64歳－62歳）は5人であった。仮にグループ3としておく。
- 5) 50歳代（59歳）の女性は2人であった。仮にグループ4としておく。
- 6) 養成講座への参加動機

グループ1 広報誌を見たから、他の講座に参加していたから、なんでもしたいけれど広報誌を見たから、健康のため体を動かしたいから、広報誌を見てボケないために、自分のためにやってみようと思ったから、広報誌を見て主人をボケさせないために。

グループ2 娘の迷惑にならないために、今に満足していない、広報誌を見て・・・、仕事をやめて暇になって何かしたいと思った。

グループ3 皆様にお世話になったからご恩返しをしたい、元気なうちに何かしたい。人に関わることをやっていきたいから、仕事を辞めて何もしていないのが3カ月、母の怪我で介護に関心を持つ、脳トレが必要だと思ったから。母方の親戚に認知症の人がいたのでそれをきつ

かけに、人のためになることをしたいから、外にでかけていたい。
人に何かをするのが好きだから、家にいると動けなくなるから・・・
時間があつてすることがないと淋しい、新しい仲間と新しいことを
してみたいから、他人のためになるようなことをしたいと思つて。

グループ 4

7) 余暇活動

グループ 1

筋トレ・体操・ラジオ体操・ストレッチ・ダンス、脳トレ・コーラ
ス、映画鑑賞・飲酒・テレビ・囲碁、回想法、旅行・海外旅行、ボ
ランティア、新聞・読書、(してみたい)料理・パソコン

グループ 2

ラジオ体操、茶道・書道・手芸・絵手紙・陶芸・折り紙、コーラ
スマージャン・DVD・トランプ・映画・テレビ、数独・旅行・お花、
植木、ボランティア、傾聴ボランティア

グループ 3

ウォーキング・体操・スポーツジム・スポーツクラブ・太極拳・ゴ
ルフ、ピアノ・オカリナ・洋裁・ハワイアンレイメイキング、食事
会、ランチ・映画、ハングル語、海外旅行・旅行、回想法ボランテ
ィア・高齢者ボランティア

グループ 4

太極拳・歩く、着付け、絵・料理、ボランティア・傾聴ボランテ
ィア・掃除ボランティア

8) 信条

グループ 1

極力歩くようにする(記憶力が落ちて、足が出にくくなった)、流れ
に沿っていく、健康・ボケ防止のために歩く、新しい仲間と新しい
ことを吸収したい、人生のしまい時、愛国心が強い、人の為になり
はじめて喜びがある

グループ 2

他人に優しく自分には厳しく、うそをつかない、現状に満足せず次
を目指す、がまん・がまん・石の上にも3年、よい事は自分のもの
にしていく、何事も自分の勉強、人を見るのは当たり前、関わる人
の気持ちがよければ、自分のものにしたい、やるからには中途半端
はよくない、元気であればこそ

グループ 3

人にされて嫌なことはしない、自分のために生きてきた人生だが、
今後は人のために生きたい。人に親切にすれば、孫の代にまわって
くる、くよくよしない、思いやりの心・一期一会、規則正しい生活
して人と関わる

グループ 4

切り替える、考えすぎない、一つのことに集中すれば好きになれる

V 考察

1. 仮に年代によってグループ分けをした理由は、先にコホートによる参加動機、余暇活動、信条などの特性の相違を念頭に置いたためである。今回も少数ながらその傾向を見出すことができた。

2. 参加動機について

- 1) グループ1は、ほとんどは自分の体力の衰え、健康問題に関わっている。また直接のきっかけは、広報誌の役割が大きい。
- 2) グループ2は、自分の信条とリンクしながら、人の世話するのは当たり前、人のためになりたいからなど、他人への配慮が伺われる。全国社会福祉協議会の動機調査とも少なからず一致する。(注4)
- 3) グループ3は、60歳を過ぎると、時間的なゆとりができ、その時間を幾つかの活動でうめながらも地域や家族との関わりを深めようとしているようすがうかがえる。
- 4) グループ4は、まだ高齢者の域に達していないせいか、自分自身に興味を集中させる傾向が見える。

3. 特性について

その人の人生経歴や信条を通して見えてくる特性は、やはりコホート別によるところが大きい。

VI まとめと今後の課題

面接が進むにつれて、各人それぞれが明確な個性をもちながら生きていることに感銘を受けた。そしてボランティア活動のみならず、自分の人生に対しても他の余暇活動へも積極的であるのが印象的であった。かつ、コホートの差も明らかと感じられた。個々人とじっくり面接すると、たとえばしぐさや表情が物語り、言葉に表わす以上に真実を言っていることも、改めてその重要性を痛感した。ハイライフ研究所の研究が命名した各世代の特徴、すなわち、70歳代は、「焼け跡世代」、60歳代は、「団塊の世代」、次が「しらせ世代」などとは大方共通しているものと思われる。

なお、今後の課題は、コホートの特性が、果たして戦争によるものなのか、あるいは教育によるものなのか、時代によるものなのかを明確にしながら、さらに説得力ある分析を行っていく事が大切であると考えます。

(注1) 上野 幸、山崎律子、高齢者におけるレクリエーション活動とその問題点～とくに有料老人ホームの場合(事例報告)～レジャー・レクリエーション研究 59号、P52-55、日本レジャー・レクリエーション学会、1997

(注2) 山崎律子、上野 幸、高橋和敏、高齢者A氏・B氏の余暇活動について～高齢者における余暇活動の類型化とレクリエーション介入方法確立に向けて～、レジャー・レクリエーション研究 41号、P88-91、日本レジャー・レクリエーション学会、1999

(注3) 上野 幸、山崎律子、高橋和敏、高齢者C氏・D氏の余暇活動について～高齢者における類型化と高齢者に対するレクリエーション援助法の確立に向けての事例研究(2)～、レジャー・レクリエーション研究 43号、P30-33、日本レジャー・レクリエーション学会、2000

(注4) 全国社会福祉協議会、全国ボランティア活動実態調査報告書 P38・44、全国社会福祉協議会、2010